

地方創生 × SDGsのまちづくり

—「世界に輝く静岡」の実現に向けて—

前田 誠彦

静岡市役所 企画局長

(要旨) 静岡市は、20市ある全国の政令指定都市のうち、人口は約70万人と最少の都市である。多くの政令指定都市が、自然減の影響を社会増で補っている中、東京から新幹線で約1時間という地理的条件を背景に、首都圏に対する転出超過による社会減が続いており、ただちにこの状況が変わることは考えにくい。

このような中、将来に渡って持続可能なまちをつくりあげていき、人口減少社会に対応できる都市としていくことは、基礎自治体としての使命であり、大きな社会的課題であるとする。

本稿では、この課題に対して、2015年に国連加盟国により合意された「SDGs」を活用して、持続可能なまちづくりを進めていこうとする取組の内容を紹介するとともに、取組の過程で発見された新たな課題と今後の展望について考察する。

キーワード： 持続可能なまちづくり、SDGs、TGC

1. 「世界に輝く静岡」の実現？

地方自治体は総合計画と称されるまちづくりの総体となる計画を持っており、本市においても、2015年度から2022年度までを計画期間とした「第3次総合計画」を策定している。

本市の総合計画は、まちづくりの目標となる「基本構想」と、その達成に向けた政策、施策の体系を明らかにした「基本計画」、具体の事業を示した「実施計画」の3層構造となっており、究極の目標は、もちろん基本構想に掲げる「『世界に輝く静岡』の実現」である。

どうしても基本構想に掲げる目指すまちの姿は、「緑あふれる・・・」や「光り輝く・・・」のような抽象的でつかみ所のないものになりがちである。「世界に輝く・・・」というのも、言うのは簡単であるが、そこに至る道筋を描くのは難題である。

そもそも、「世界に輝く静岡」なるものは、ど

のような姿なのであろうか。世界各国から静岡市へ観光に訪れるようになればよいのか、国際会議が頻繁に開かれ、各国の有識者が集まるようになればよいのか、はたまた「MADE IN SHIZUOKA」の何らかの商品が、世界の市場に受け入れられていければよいのか。

片っ端から市職員に声を掛けて聞いてみたが、誰からも明確な答えは返ってこない。「答えがないなら、自分なりに作っていくしかない。」と肚を決めたが、自問自答を繰り返す日々が続いていたのが実情である。

2. TGC × SDGs？

このような中、2017年夏に「静岡市でTGCを開催しないか。」との提案を受けた。TGC、東京ガールズコレクションは、若者、特に10代、20代の女性に圧倒的な影響力を持つファッションイベントであり、集客やSNSでの情報発信力からも魅力的なコ

ンテンツではあるが、当然開催に当たっては市も応分の負担をしなければならない。

自治体の企画部門には、この手のイベント開催の提案がしばしばあり、税金が原資である以上、慎重に判断する必要があるのは言うまでもない。

しかし、協議を重ねる中で、TGCが単なるファッションイベントにとどまらず、公共性を備えた方向を目指しており、具体的には、SDGsをキーワードに国連ニューヨーク本部でTGCファッションセレモニーの開催を予定していることが明らかになった。

さらに、本市が趣旨に賛同し、協力関係ができるのであれば、SDGs推進を核としたTGCを初めて静岡市で開催する心積もりもある、とのことであった。

恥を忍んで正直に言えば、私は当時SDGsに関して全く知識はなかったが、直感的に世界に輝く静岡の実現とSDGsの推進には親和性があるのではと考え、にわかに文献を読み漁り、ある程度の知識を得て、SDGs推進を目的としたTGCの本市開催を市幹部に進言し、了解を取り付けた。

言うまでもなく、SDGsは193の国連加盟国で合意した2030年の17のゴールであり、169のターゲットや232の指標はさておき、自治体の行っている事業は17のゴールのいずれかに結び付くことは明らかである。

ターゲットや指標を分析し、そのまま適用できないものを静岡市に合わせてローカライズできれば、世界レベルとの比較が可能ではないか、これにより世界に輝いているかどうかという判断基準に使えるのではないかという仮説である。

とはいえ、不安な要素はたくさんあり、そもそもSDGsという言葉自体が市民に馴染みがなく、どの程度認知されているのかも不明である。

TGCがいかに強力なコンテンツとはいえ、対象となる層は極めて限定されるため、同時にSDGs普及啓発イベントを集中開催し、認知度を高める努力が必要と考えた。

そこで、TGCしずおかの開催される2019年1月12日をファイナルイベントに位置づけ、静岡市は成人式を1月3日に開催することから、ここをキックオフイベントとして「SDGsウィーク」と銘打つ

て進めることを提案し、こちらも了承されたため準備に入ることにした。

3. 認知度50%？

このような中、2018年5月に田辺市長が国連ニューヨーク本部における「SDGs推進会議」でスピーチを行う運びとなった。

このスピーチの際、市長は「認知度を50%まで引き上げたい。」と決意を表明した。（写真1、2）

事前に行った静岡市独自の調査では、市民認知度は2%に過ぎなかったため、ありがたいほど高いハードルを課された感は否めないが、やりがいがある目標を設定されたと理解し、まずは集中的普及啓発期間である「SDGsウィーク」の成功に向け、注力することとした。



写真1 SDGs推進会議（国連ニューヨーク本部）でスピーチする田辺市長（右）



写真2 会議議長であるアンワルル・K. チャウドリー国連大使（左）と田辺市長（右）

4. SDGsウィーク

SDGsウィーク期間中に行う普及啓発イベントをカレンダー形式でまとめ、臨時のタブロイド版(図1)を発行して周知に努めた。この中からいくつか主な取組を紹介する。

図1 タブロイド紙「SDGs Week in SHIZUOKA」(2018年12月発行) 4、5ページ

(1) 成人式

2019年1月3日、成人式を皮切りにSDGsウィークが始まった。

余談ではあるが、静岡市の成人式の特徴は、市が主催するのではなく、新成人と次年度成人による実行委員会形式で執り行われる点にある。

これは、以前は市主催で行っていたものの、市長の祝辞さえきちんと聞かない成人の姿に、「税金を使ってやる必要はない。」と、一時中断していたが、「自分たちできちんとやるので、やらせてほしい。」という声を受けて再開したという経緯がある。

したがって、市長や議長は来賓扱いで、第1部の儀式的な部分で祝辞を述べ、第2部は若者らしいエネルギーな企画という構成で進み、祝辞をしっかりと聞くように実行委員会が運営するようになっている。

この実行委員会と協議を行い、TGC主催者である株式会社W TOKYOの協力により、TGCしずおか出演予定のモデルをサプライズゲストとして派遣していただき、モデルからSDGsについて語ってもらうこととした。

結果は上々で、モデル登場で会場がワッと沸き、SDGsについても耳を傾けてくれる新成人の姿に感動を覚えた。行政の職員が淡々と正確に伝えても、若者の心にはなかなか響かないが、憧れのモデルが自分の言葉で語ることが実に効果的であることが実証されたと考える。(写真3)



写真3 2019静岡市成人式
壇上：実行委員会委員とサプライズゲストモデル(中央)

(2) 静岡市SDGs中学生サミット

2020年度からは小学生、2021年度からは中学生に対してSDGsを学ぶことを定めた新学習指導要領が公表されている。

このことに、いち早く静岡市教育委員会が着目し、市内全ての中学校においてSDGsの調査研究を行い、研究成果を発表する場を作りたいとの申し出があった。

一部の中学校ではなく、市内全ての中学校という点は「誰一人取り残さない」というSDGsの理念に通じるものであり、ありがたい提案であったが、実現に当たっては、先生方も生徒の皆さんも相当苦勞するであろうことは容易に推測でき、本当に実施までこぎつけることができるのかという一抹の不安はあった。

しかし、我々のできることは、発表の場を工夫して、先生方や生徒の皆さんの労苦に応えることだと考え、市議会の本会議場を会場として用意し、議会形式で生徒の皆さんと市幹部が質疑応答を行う方法を考えた。

当初は、「議場は神聖な場所であり、イベントに貸すようなものではない。」という声や、質疑応答を行う市幹部を、市長、副市長、政策官や局長クラスではなく、職位を下げて局次長クラスで対応したらどうかという案もあった。

しかし、先生方や生徒の皆さんが夏休み前から真摯に取り組んだ成果を発表する晴れの舞台であることを説明して理解を求め、本会議場の借用、議会同様に市長、副市長、政策官や局長クラスなどが出席、という正に本会議仕様での場を整えた。

このような本格的な舞台装置のもと、当日は、緊張の色を隠せない各中学校の代表者が、議員席に座り、我々の期待をはるかに超える研究成果を発表するに至った。(写真4)

最後に、全員で「SDGs中学生宣言」を行ってサミットは幕を閉じたが、中学生の皆さんからは口々に「SDGsを学んで得るものがあった」、「議場という場所を準備してもらい、市議会のことを勉強するきっかけにもなった」、という声を聞くことができ、ホッとする思いであった。



写真4 静岡市SDGs中学生サミット

右側の議席に中学生が、左側の当局席に市長以下幹部職員がそれぞれ座り、議会さながらの形式で行われた。

(3) SDGs吹奏楽団

SDGsウィークの中盤に行った「JICA東京SDGs吹奏楽団スペシャルコンサート」は、当初の想像をはるかに上回る素晴らしい内容であった。

実に失礼なことだが、我々の調査不足もあり、この楽団を私はアマチュアの草の根楽団ではないかと勝手に思い込んでいた。

私自身が高校時代に少々音楽関係をたしなんでいたことから、主要な楽団は把握している、との思い上がりを後に恥じることとなるとは、当初は想像だにできなかった。

楽団側からのご提案で、前日に中学生・高校生の吹奏楽部員に指導いただける機会をいただき、その様子を見学に行った際に、「これは只者ではない。」とすぐに気づいた。

それもそのはず、楽団の中心となっている指揮者・さかはし矢波氏は東京フィルハーモニーに所属し、他のメンバーも全てプロ奏者というバリバリのプロ楽団であった。

後ほど話を伺い、「SDGs」というキーワードの下に、ふだんは別々に活動している奏者が集うというSDGsの目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」を体現するような楽団であることがわかった。

国連広報センターの根本所長は、「SDGsは、様々な異なる立場の人をつなげる接着剤」とおっしゃっていたが、正に普通ではともに演奏する機会はないであろう異なる立場のプロ奏者がつながって

いる稀有な楽団である。

にもかかわらず、用意した会場は、400人程度の収容人数で、しかも音楽ホールではない、という失礼な対応をしてしまったが、さかはし氏からは、「実は関東以外で活動するのは初めてであり、もっと少人数の公民館のような所で演奏することもあるので気になさらなくて結構です。むしろ、活動の機会を与えていただけてありがたい。」との泣けるコメントをいただいた。

改めて、この場を借りてお礼を申し上げたい。

コンサート自体は、平日にもかかわらず満員御礼で、さかはし氏の巧みなMCもあり、来場された方々に対するSDGsの認知度も深まり、大成功であった。（写真5）



写真5 JICA東京SDGs吹奏楽団スペシャルコンサート
写真はSDGs吹奏楽団と中・高校生による合同演奏の様子

（4）「SDGs推進 TGC しずおか 2019 by TOKYO GIRLS COLLECTION」と「SDGs COLLECTION supported by TGC しずおか 2019」

ファイナルイベントとしたTGCしずおかの会場は、「ツインメッセ静岡」という名前のイベント展示場で、その名の通り北館と南館の二つの大展示場が隣接している。

TGCしずおかは北館で行われるが、対象者層は先述したとおり、若者、特に10代、20代を中心とした女性に偏っており、幅広く普及啓発を図っていくためには十分ではないと考えた。

そこで、同日に、北館と隣り合わせの南館において、SDGsに取り組む企業、団体や大学、高校などのブース出展やSDGs普及啓発ステージなどを行う、TGCしずおか関連イベントを行うこととした。

（写真6、7）

関連イベントは、静岡市観光親善大使であるミス・ユニバース2007の森理世氏プロデュースのダンスステージや、フェアトレード商品などを販売するマルシェも同時開催して集客に努め、様々な世代に足を運んでいただけるように、「SDGs COLLECTION supported by TGC しずおか 2019」というネーミングのイベントとして企画した。

TGCしずおかについては、噂に違わず若い女性が魅了する強力なコンテンツで、土曜日開催にもかかわらず、既に木曜日から泊まりで並び始めるというコアなファンもいた。

話を聞くと、名古屋や横浜などから来ており、これまで静岡市を訪れたことはないとのことなので、SDGsのみならず静岡市のアピールにも一役買っている。

TGCしずおかでは、地元企業でSDGsに先駆的に取り組む株式会社シャンソン化粧品のステージや、静岡市長が登場する静岡市ステージなど、随所にSDGsの普及啓発を行う仕掛けを凝らし、華やかなモデルがランウェイを闊歩する姿に見とれつつ、知らず知らずのうちにSDGsを意識できるように工夫した。

おかげさまで、北館、南館あわせて18,000人を超える方々への普及啓発を行うことができ、初年度の重点普及啓発期間である「SDGsウィーク」のファイナルにふさわしいイベントであった。

また、経済的な面においても、TGCだけでも経済波及効果5.2億円、パブリシティ効果13.3億円と試算され、投入した市の税金をはるかに上回る効果があった。



○ SDGs推進 TGC しずおか 2019 by TOKYO GIRLS COLLECTION

写真6 SDGs推進 TGC しずおか 2019 by TOKYO GIRLS COLLECTION



写真7 SDGs COLLECTION supported by TGC
しずおか 2019

5. SDGsウィークの課題とその後の展開

SDGsウィーク終了後に、改めて調査を行ったところ、驚くことに認知度は36.2%まで引き上がっていた。同時期（2019年）の他団体調査では約1～2割程度であったことを考えると、かなり高い数字であるといえよう。連日、メディアに取り上げてもらうことにより、目や耳にする機会が増えたことによるのではないかと考える。

田辺市長が国連で述べた「認知度50%」にまで達することはできなかったが、普及啓発重点期間の1年目としては、まずまずの結果と考える。

とはいえ、実際に運営してみて、様々な課題も明らかになった。

まず、ウィークという形で短期間に集中的に行ったことは、連日、新聞、TV、ラジオなどのメディアに取り上げてもらえることで、認知度向上に効果があった反面、問い合わせ等も集中することとなり、職員への負担が大きかった。

また、年末年始と様々な行事がある中で、平日の集客がなかなか難しいという実情もあると同時に、関心の高い市民からは「毎日出かけることになるのは、けっこう大変である。」との声も聞かれた。

そこで、今回は「SDGsウィーク」を「SDGsマンス」に拡大し、約1か月間を対象期間として週末をメインにイベントを組み、集客面や事務負担の平準化を図ることとした。

次に、イベントの中身についてであるが、青年会議所や官民の協議会が主体となって運営したものもあったが、まだまだ市が主催者となるものが

多く、「市が推進しているもの」という感を拭ききることができなかった。

言うまでもなく、SDGsの達成は民間企業や市民が中心となって進めなければ覚束ないが、まだそこまで至っていないことは明らかである。

これについては、SDGsに取り組む企業、団体などの表彰や認証制度などを検討し、裾野を広げていく努力をしていくこととした。

また、TGCしずおかに出演したモデルの中には、SDGs推進のためのTGCという認識がなく、数ある地方開催の場所のひとつとしてしか静岡でのTGCを理解していないと思われる発言も耳にした。

これについては、さらにグレードアップした内容にするとともに、モデルの皆さんへの意識を徹底してもらえるよう主催者に申し入れることとした。

実は、これらの反省点を踏まえて、2020年1月3日から1月26日にかけて、「SDGsマンス」を実施したので、本来であればそちらを寄稿したいところであるが、現在その実施効果を検証中のため昨年度の取り組みを記載させていただいている。ご容赦いただきたい。

6. 普及啓発だけでいいの？

「SDGsウィーク」や「SDGsマンス」は、まずはこのような世界共通の目標というものが「認知」されることを目的としている。

しかし、市民生活とこの目標との間には距離がありすぎて、「だからどうした。」という話になってしまう。

そのことは、SDGsに取り組もうと決めた時点から問題意識を持っていたため、普及啓発と同時並行で「SDGsと市民生活」についても検討を始め、どのように市民の皆さんに、ふだんの暮らしとつながるのかという手段を模索した。

まず、ぶつかったのはSDGsの目標年次となっている2030年の目指す姿は、行政としてはあまり意識したことがないという点である。

自治体職員はピンとくるかもしれないが、非常に多くの行政計画を策定している。そして、そのうちの大半は、法律に義務付けられている、ある

いは努力義務を課されているケースであり、計画期間も概ね5年程度に過ぎない。

もちろん、それ以上長期の視点を持っていないわけではないが、それらは「構想」という形でまとめられており、SDGsのように169のターゲットや232の指標が定められていることは、まずないのである。

そこで、2030年の目指す姿と、静岡市にローカライズした指標、目標の設定に取りかかりたいと考え、大学と共同研究を開始した。

しかしながら、研究を重ねる中で、一足飛びに目指す姿を求めるのではなく、現在市が行っている施策をSDGsの観点から見直し、不足している視点や考えを整理して「処方箋」といった形で提示する方が望ましいとの結論に達した。

また、市の行っている全ての事業をSDGsに結び付けることを考えるのではなく、中心的なプロジェクトとして進めている「歴史文化の拠点づくり」、「海洋文化の拠点づくり」、「教育文化の拠点づくり」、「健康長寿のまちの推進」、「まちは劇場の推進」という「5大構想」と位置付けているものに限定していくことが、市民にとってはわかりやすいだろうとの考えに至った。

2年間かけて行ったこの調査研究の成果も、この3月にまとまることとなっており、現時点では詳しく内容を記載できないが、こちらもご了承いただきたい。

今のところ、普及啓発のイベント系のみが目についてしまうが、市は国連の広報マンではないので、SDGsの普及啓発は、将来静岡市が持続的に発展していくための布石である。

ともすれば、この原点を忘れて普及啓発の手段のみの議論になりがちなので、自戒の念も含めて強調させていただきたい。

7. おわりに

このところ、SDGsの17色をあしらったカラーホイールのバッジをスーツの胸につけているサラリーマンの姿を目にする機会が随分と増えてきていると感じる。

また、TVで映し出される政治家や首長、産業

界のリーダーなどにも、この目をひくバッジをつけた姿が見受けられ、新聞、雑誌などでも「SDGs」という活字が躍るようになってきている。

しかしながら、注意深く観察してみると、単に、それぞれの企業の取り組みや自治体の事業を、17のアイコンで示されるゴールに紐づけているだけで満足してしまっているように見受けられるケースも少なくない。

SDGsの考え方の原点は、世界中の193か国で合意した共通の目標という点である。それぞれ、政治も文化も言語も習慣も経済力も異なる国々が、そのような背景はさておき、我々の住む地球を未来に向けて持続可能な世界にするために一致団結して取り組んでいこうという試みである。

そして、世界は多くの国々に分割されており、その国々はさらに細分化されて統治されているのが、一般的である。

日本においては、国には47の都道府県があり、約1,800の市町村があり、さらに細分化された地域コミュニティがあり、その中で暮らす家族があり、さらには個人があるという構造になっている。

日本だけがどれほど躍起になろうと、SDGsの目標達成は不可能である。同様に、一部の都道府県だけが努力しても、市町村が頑張ろうとも到底無理である。

このように考えていくと、ひとりひとりの行動が世界を変えることなどできる相談ではないが、結局はひとりひとりがSDGsの共通目標を達成していこうと考えて行動していかない限り、やはり前には進まないのである。

静岡市が、懸命にSDGsの普及啓発に取り組んでいるのは、まずこのことに興味、関心を持ってもらい、あまりに遠い世界との距離を意識する市民を増やしていきたいとの思いである。

たとえば、自動車を購入する場面において、環境への負荷は少ないが高価な自動車と、環境への負荷は大きいが高価な自動車との選択肢があった際に、迷わず前者を選ぶような消費者マインドを持った市民になっていただきたいということである。

また、企業活動として、原材料調達の場合において、発展途上国で労働者の生活を無視して安価

な労働力のもと低価格が提示された原材料と、労働者の「飢餓」や「貧困」に配慮した結果、ある程度高い価格で調達することになる原材料を選択する際に、後者を選ぶ経営者になっていただきたいということである。

このケースで言うと、経営者の立場に立てば、一般的には一円でも安く原材料を調達することが、商品価格へ跳ね返ることを考慮すると正しい行動となるが、その先の消費者が「価格」だけでは選ばないのであれば、必ずしも正解にはならなくなるのである。

本市の人口は、冒頭に要旨で記載した通り、約70万人、日本の人口約1億2,600万人の0.6%に過ぎない。世界の人口約77億1,500万人から言えば、0.01%と、ほとんど何の影響も与えることができない程度である。

だからといって、何も変える努力をしなければ、何も変わらないのは当然のことである。

静岡市は、現時点ではアジア大陸でたった一つ、SDGsの「Local 2030 Hub」都市として、国連に認められている。

幸いなことに、内閣府のアンケート調査では、全国の80%に及ぶ地方自治体が、「SDGsに関心がある」と回答したとの調査結果が出ている。

田辺市長は、よく「SDGsを認知から理解、そして行動へつなげていきたい。」との発言をしているが、全国的にも認知度は高まっていくと推測する。

現在、「SDGsウィーク」から「SDGsマンス」に期間を拡大して、普及啓発に努めたが、どの程度認知度が向上したかというアンケート結果を集計

中である。どうやら、昨年の36%よりかなり向上したものの、目標とする50%にはあと一息といったところのようである。来年度は重点的普及啓発期間の最終年として、「マンス」をさらに「シーズン」に拡大し、集大成としたい。

また、7,000人近い市職員に対するアンケート結果も集計中であるが、さすがに認知度は90%以上、「理解している」と答える職員も75%を超える見込みである。

先述したとおり、静岡市という自治体は、決して世界を一気に変えるような都市ではないが、まずは自分たちの手の届く範囲を固め、周辺へ波及していくという一石を投じることぐらいはできるはずであり、これこそがHub都市としての役割だと考える。

そして、SDGsの理念を体現できるような都市こそ、将来も持続可能な都市となっていくと確信している。

引き続き、SDGsの推進に取り組み、「世界に輝く静岡の実現」に向けて、努力を続けていきたい。

参考文献

- 1) 第3次静岡市総合計画, 2015. (www.city.shizuoka.lg.jp/750_000004.html)
- 2) 20代から30代を対象にしたSDGsに係るアンケート調査結果, 静岡市編, 2017. (<https://www.city.shizuoka.lg.jp/000776858.pdf>)
- 3) 「SDGs 推進 TGC SHIZUOKA 2019 by TOKYO GIRLS COLLECTION」における経済波及効果分析 報告書, 静岡県地域経済分析研究会編, 2019. (www.city.shizuoka.lg.jp/000813148.pdf)
- 4) 令和元年度SDGsに関する全国アンケート 調査結果, 自治体SDGs推進評価・調査検討会編, 2019. (www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/kankyo/kaigi/dai20/sdgs_hyoka20_shiryo6-1.pdf)
- 5) 静岡市SDGsホームページ (www.city.shizuoka.lg.jp/556_000450.html)